



発行所
公益社団法人 国民文化研究会
(九州←東京←全国)
東京都渋谷区東1-13-1-402
振替 00170-1-60507
電話 03-5468-6230
FAX 03-5468-1470
http://www.kokubunken.or.jp/
E-mail: info@kokubunken.or.jp
月刊「国民同胞」編集部
毎月一回10日発行
購読料 年間2000円

聖徳太子撰述『勝鬘経義疏』に触れて

―「惑に在りしより依と為るなり」―

西山八郎

標題に掲げた『勝鬘経義疏』は、今から凡そ千四百余年前、国家制度がやうやく整ひ始めた飛鳥時代に聖徳太子によつて撰述された。この書物は仏教經典の一つである勝鬘経についての注釈書で、三十六歳から三十八歳にかけての一年九ヶ月余を費やして著述された。

りながら独自の見解が披瀝されてをり、太子ご自身の実人生に照らして考察探求された独自の文献であることが偲ばれるのである。

經典の名ともなつた勝鬘は、印度のガンジス川中流域にあつた古代国家舎衛国の王家に生まれて亜踰闍国の有稱王の妃となつた女性で、かつて小乗の教へを信奉してゐた勝鬘が両親の勧めによつて大乘の教へに目覚め、仏の教へを信受し広説していく過程が描かれてゐる。

第十二章の顛倒真実章では、惑(煩惱)と如来蔵(如来となり得る清浄な心)との関係が説かれてゐる。世尊、生死は如来蔵に依る。如来蔵を以ての故に本際不可知と説く。

これが章の冒頭に出てくる經典の本文で、凡その意味は次のやうになる。「生死(迷ひ多き衆生の人生)は如来蔵を拠り所としてゐます。衆生がこの如来蔵を有してゐることによつて衆生の心の根源を推し量ることは到底できないのです」。この短い文章について義疏では次のやうに解釈されてゐる。

物聞きて便ち謂へらく、然らば即ち惑を出で、後方に物の依と為る、惑に在りて依と為ると言ふには非ざるべしと。所以に今

勝鬘経義疏では、經典の一語一語について詳細な注釈が加へられてゐるが、「私に懐へらく」「今は須ひず」などの言葉が随所に見られ、經典に込められた仏の心に迫

積すらく、無作の一滅は即ち如来蔵なり。生死の神明は如来蔵に依りて相續して滅せず。但惑を出で、方に物の依と為るには非ず、惑に在りしより依と為るなりと。

意味は凡そ次のとおりである。「前章の一依章で述べられてゐる煩惱を断ち真実の世界に生きることが最も大切なことだといふ教へを」衆生が聞けば、煩惱を脱した後に初めて仏に至る真実の心を拠り所として生きていくことができるのであつて、煩惱に塗れてゐてはそれができないと考へるでせう。確かに煩惱を脱却することで芽生える清浄な心こそ如来蔵です。そして、衆生が本来持つてゐる真実の心は如来蔵によつて相續され決して消滅することはありません。しかし、煩惱を脱却した後開始して衆生が真実の心を拠り所として生きることができ

るのではなく、煩惱を未だ脱却し得てゐない中にあつても、闇に埋もれた真実の心に目覚めれば、それを拠り所として生きていくことはできるのです」

親族が相争ふ動乱の世にありながら、その現実人生に徹し一筋の灯明を得んと經典に臨まれ苦惱濁乱のご生涯を送られた太子は、迷ひや不安、執着といった煩惱が現

実生活においては絶ち難い事実であることを直視され、それでもなほ、揺らぐ衆生の心の内に仏性があることを信知されてゐられるのである。太子は「今一切の衆生に皆真実の性あることを明す。若し此性なくんば、即ち一化便ち尽きて草木と殊ならず。此性あるに由るが故に、相續して断ぜず、終に大明を得」とも述べられてゐる。「一化」とは釈迦一代の教化のことで「大明」とは大乗の悟りの知恵を指してゐるが、如来蔵に依つて仏の教へが絶えることな

く繼承されていくやうに太子が希求された国民生活の理想の姿も、人々の真心によつていつの日か必ず実現される日が来ることを信じてゐられたに違ひない。

太子の教へと理想は、争ひによつて災ひが民に及ぶことを避けるため御身を捧げられた御嫡嗣山背大兄王に、そして、時代を経て最澄・親鸞をはじめとする多くの仏教徒へ、更に国民全体へ野火のごとく拡がり今日まで受け継がれてきた。このことは仏教の普及といふにとどまらず、内実に秘められた肇国以来連綿と続いてきた尊い日本精神の継承でもあつたことを見落としてはならないと思ふ。

(鳥栖市・みどりヶ丘保育園園長)